

登山行動に関する社会心理学的研究^{*1)2)}

——登山動機の構造とその変遷——

岡 本 卓 也**
藤 原 武 弘***

“Why did you want to climb Mount Everest?”
“Because it’s there.”

問題

山登りを全くしない人でも知っているであろう「そこに山（エベレスト）があるから」という言葉は、イギリスの登山家ジョージ・マロリー（1886–1924）がニューヨークタイムズの記者に対して答えた言葉である（The New York Times, 1923）。山に登る理由など無い、ただ山が好きだから登るのだ、そのような問をすること自体が下らないとでも言わんとしているかのように解釈をされがちであり、多くの登山家たちの共感を得ているようだ。しかし、対談の先を読んでみると、彼の言わんとすることはそういった内容では無かったことが分かる。彼は続けている。

Everest is the highest mountain in the world, and no man has reached its summit. Its existence is a challenge. The answer is instinctive, a part, I suppose, of man’s desire to conquer the universe.

（The New York Times, 1923）

本多（1966）が指摘するように、マロリーが答

えたのは、単に『山に登る』という一般的行為に対する回答ではなく、『処女峰としてのエベレストに登る理由』に対して『そこにあるから』と答えたのである。本多（1966）はさらに手厳しく指摘をする。「現在の富士山や槍ヶ岳に登る無数の人々が、もし『そこにあるから』と回答するならば、これは抱腹絶倒すべき喜劇のセリフになろう。他人のやらぬことをやるという基本精神から出発しているマロリーの行為は、他人が登るから自分も登るという流行現象を基本とする行為とは、まさに正反対の極にある。」

実際のところ、「人はなぜ山に登るのか」という問に対して、「そこに山があるから」と答えが返ってきたとき、相手の動機を理解したと言えるのだろうか。あるいは、理解出来ないからこそ、このような答に納得してしまうのかもしれない。

本稿では、なぜ人が山に登るのかという問いに対して、社会心理学的観点から検討を試みる。

近代登山以前の登山

登山の動機を理解するため、まずは日本人と山との関わりについて歴史的観点からまとめておこう。

原始的には、大自然の驚異に対する畏怖の念から、山は崇拝の対象となり、山岳信仰の発生に繋がる。山崎（1986）によれば、崇拝の対象となっ

*キーワード：登山、登山動機、自己決定理論

**信州大学人文学部准教授

***関西学院大学社会学部教授

1）本研究の一部は平成26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）：研究課題番号26380841）の助成によって行われました。

2）本研究の資料の一部は、第一著者の指導のもとに作成された2013年度信州大学人文学部ブレ卒業論文（二宮建太）の研究として行われました。記して感謝の意を表する。

たのは、山の大小にかかわらず、群峰に抜きんで、円錐形または笠状で、特に山頂のとがった火山特有のコニーデ型に属するものであり、富士山を始め、北から、岩木山、鳥海山、安達太良山、山二荒山、筑波山、榛名山、白山、立山、蓼科山、などであり、固有の神名が与えられている山も多い。しかし、必ずしもそれらの山に登り祈るというわけではなく、遠くから拝む存在であった。

もちろん、この頃の人たちが一切山に登らなかったわけではなく、高く険しい山々にこそ登りはしないが、近くの低山などには登っていたといわれている。古事記にも「梯立ての倉椅山は峻しけど妹と登れば峻しくもあらず（倉椅山は険しいけれど、妻と登れば険しいこともない）（倉野，1963）」という歌があるように、身近な里山には登っていたことが分かる。

中世には、山中に入って超人的な修行を行う仏教系統の山岳修験者が出現する。例えば木曾の御嶽も、古代には山そのものを崇拜する原始宗教から発し、その後修験者の支配に移る（山崎，1986）。7世紀ごろからは信仰登山が盛んになり、鎌倉時代には武士や貴族中心だった参詣登山は、徐々に一般庶民へと裾野を広げることになる。修験にもとづいた行者の登山はもとより、一般の人々の間でも、それぞれの霊山への参詣登山が一つの風習として行われ、登拝によって死後は極楽に行けると人々は考え、途中の旅の苦労や、登山の苦しみをいとわず精進して身を清め、神や仏に山々の頂での祈りを捧げたのである（山崎，1986）。

近世になると、軍事戦略上の必要から山岳の要路を切り開くための登山が行われる。また、造林、造木の切り出し、租税の取り立てのための山林保護が求められ、そのために山に入ることが盛んになってくる。江戸時代には中世からの信仰登山がさらに一般民衆の間に広がる。例えば、槍ヶ岳を開山したと言われる播隆和尚は、一般の信者が槍ヶ岳に登ることを念頭に、信者らの安全確保のため、山頂に鉄の鎖をかけている。

江戸時代の後期になると、信仰登山も様変わりしてきた。これまでのように修験の作法に則った行者や信者だけではなく、次第に物見遊山的な色

彩が強まり精進潔斎についてもごく簡単に済まされるようになった（小泉，2001）。またこの頃各地に作られた講でも信仰としての登山が盛んに行われている。

近代登山の隆盛

それではヨーロッパではどうだったのだろうか。桑原（1953）は、ヨーロッパでの登山について、荒れたアルプスの山肌が旧約聖書の大洪水の跡だと解釈されたり、ヨーロッパ最高峰のモンブランが「呪われの山」と呼ばれたりしていた事、アルプスが悪魔や竜の住む魔の山として考えられてきた事などを指摘している。そのため、例外的に聖人たちが山ごもりをした記録があるものの、18世紀頃まではキリスト教的思想の影響から、山は恐怖の対象でこそあれ、登山を目的として山に入ることはほとんど無かったようだ。16世紀～17世紀にかけて、ルター以降の宗教改革と科学革命が進む中、博物学が盛んになり、その研究対象として地質学者や植物学者が山へ入っていくようになった。例えば、冒頭で触れたマロリーのエベレスト登攀の最後の姿を見たオデルも地質学者であった。この頃になって山が恐怖の対象から美しく魅力ある場所という認識が変わってくる。アルプスの自然や景観が描写されたルソーの「新エロイズ（Rousseau, 1761）」、ゲーテの「イタリア紀行（Goethe, 1816-29）」などの作品が人気を博し、この影響からヨーロッパではアルプスブームが起こることになる。特にルソーの『自然に還れ』という言葉が、18世紀以降のヨーロッパの登山ブームに与えた影響は大きかった（古澤，2009）。この頃から近代登山の基盤が出来たといえるだろう。

19世紀頃には多くのイギリス人がアルプスを訪れていたのだが、その中から未踏峰の征服を目論む登山家が集中的に現れる。4,000メートル級の山々のピークの多くが陥落され、この時代はアルプス登山の「金の時代」と呼ばれている（小泉，2001）。その後、高さに限らない未踏の山々やヴァリエーションルートの開拓を目標とする「銀の時代」が訪れる。この頃のヨーロッパの登山は山の征服・初登頂を目指し、そうした困難を競うところに価値が置かれており、いわば、パイ

オニアワーク（本多，1966）としての登山といえるだろう。このようにイギリスを中心としたヨーロッパで近代登山が発達した。

それでは日本の近代登山はどのように始まったのだろうか。そのきっかけは、明治初期に日本を訪れたイギリス人らが、日本の山の魅力を本国に伝えたことに端を発するようだ。その後、ウェストンの「日本アルプスの登山と探検（Weston, 1896）」を経て、1905年に「日本山岳会」が発足し、登山が急速に広まることになる。しかし、小泉（2001）によれば、この頃の登山は庶民のスポーツやレジャーという類ではなく、一部のエリートたちが行うものであった。その後、横有恒を中心とするパーティーがマナスルへの登頂を成功させた（1956年）ことをきっかけに第一次登山ブームがおこり、大学にはワングル部や山岳部が設置されることになる（松田，2005）。登り方についても難しいルートをより厳しい季節に登攀するというだけでなく、開発された山々を近代的な装備で安全に登るという方向に変わっていった（小泉，2001）。さらに1980年代には週休二日制になったことなどを背景に、バブル期の海外旅行に変わるレジャーとして中高年を中心とした登山ブームがおき、「日本百名山」（深田，1964）が注目される。いわば海外旅行で体験していた「非日常感」をそれに替わる山という場所で体感しようとしているからだという指摘もある。

さらに近年では、登山はスポーツ化し、レジャーの1つとして定着してきた。「日本百名山」（深田，1964）につづく「日本200名山」（深田クラブ，1992）を中心に登山道の整備が進み、毎年多くの登山者が訪れるようになる。2009年には「山ガール」という言葉も注目を集めることになり、若い女性がレジャーの一つとして山登りに訪れるようになった。

このように歴史を繙いていくと、山は、恐怖の存在であり、修行の場であり、生活の糧を得る場所であり、克服する対象であり、レジャーであり、非日常を体感する場であるといえるだろう。

登山に関する心理学的研究

登山に関する実証研究はそれほど多くはない。古典的には Ryn（1974）や Bratton, Kinnear, &

Koroluk（1979）の研究がある。例えば、Ryn（1974）は、アルピニストの性格について、自分の可能性を試したいという欲求が強いことなどを指摘している。また、国内の研究としては小林・小川（1968）が登山の目的とパーソナリティーについて研究を行なっている。これらの研究が対象としているアルピニストは、ロッククライミングなどを行う一流の登山家やプロとしてのクライマーのことである。登山の普及の歴史との対応を考えてみても、先に指摘したパイオニアワークとしての登山に限定された研究だったと言えるだろう。

また、近年では、主に低山の日帰りハイカーを対象に調査を行った瀧ヶ崎（1983, 1999, 2005）の研究や、山岳会やハイキング同好会に所属する中高年を対象に登山の動機を尋ねた飯田・坂本・遠藤（1989）の研究がある。しかしいずれの調査も、近年の登山者の動向を反映した調査対象者とはいえないだろう。

あるいは、フロー状態（Csikszentmihalyi, 1975, 1990）に注目した研究もいくつか挙げられる。例えば、佐藤（1989）は登山者の動機とフロー体験に関する研究を行い、20代は他の年代と比べて能力の向上や挑戦を追求する動機が強く、活動の頻度が高いほどフロー体験を強く報告していることを示している。張本・大村・平良・小橋川・川端（2000）では登山におけるフロー体験に特化した「登山フロー尺度」を開発し、「明瞭な目標と有能感」、「自然との融合」、「仲間」、「行為と意識の融合」、「自己認識」、「時間感覚の変化」、「達成意欲」、「再生」、「注意集中」、「自己目的的经验」の10因子が抽出されている。しかしこれらのフローを体験するということ自体が、全ての登山者に見られる現象ではなく、ロッククライミングなどを行う経験豊富な登山家やプロとしてのクライマーが中心であり、いずれにせよ、近年の登山者の動向を踏まえた内容とはいえないだろう。

以上のような状況を踏まえ、本研究ではまず、近年の登山者の実態、登山動機の構造を明らかにするため、山小屋を利用する登山客（宿泊者とは限らない）を対象に質問紙調査を行った。登山の動機については、探索的に調べるため自由記述及び面接調査によってたずねた。面接調査の結果に

については次稿において報告する。

方法

調査 1

調査日：2013 年 9 月 10 日～14 日までの 5 日間。

調査地：北アルプス（飛騨山脈）の燕岳（標高 2,763 m）の頂上手前に位置する山小屋「燕山荘」で調査を行った。燕岳は、北アルプス三大急登の 1 つである合戦尾根の上方に位置し、一般的な登攀時間は 4 時間である（磯貝・三宅, 2012）。長野県では、中学生の教育プログラムである学校登山で最も登攀されており、北アルプスの入門的な山といえる。また、北アルプス表銀座のルート上でもあり、初心者から熟練者まで幅広い登山経験を持つ登山者がいる。

調査対象者：質問紙を配布・回収することができた調査対象者は 160 名（男性 74 名・女性 77 名・不明 9 名）であった。平均年齢は男性 48.78($SD = 16.08$) 歳、女性 46.57($SD = 16.45$) 歳であり、最少年齢は 12 歳で最高年齢は 85 歳であった。なお、このうち 12 名については半構造化面接も行った。

調査項目：山登りの経験年数、山登りの頻度、山登りをする理由（きっかけ）、山登りの同行者

調査 2
調査日：2014 年 9 月 21 日～24 日までの 4 日間。

調査地：奥上高地に位置する山小屋「横尾山荘（標高 1,620 m）」で調査を行った。横尾山荘は、槍ヶ岳、穂高岳、蝶ヶ岳、常念岳方面への分岐点でもあり各方面への登山基地として用いられることが多い。また、上高地バスターミナルから 3 時間程度の場所であり、ここまでは本格的な登山の装備がなくてもたどり着くことの出来る場所で、様々なレベルの登山者が訪れる場所である。

調査対象者：質問紙を配布・回収することができた調査対象者は 110 名（男性 71 名・女性 39 名）であった。平均年齢は男性 43.69($SD = 16.08$) 歳、女性 41.79($SD = 16.17$) 歳であり、最少年齢は 11 歳で最高年齢は 73 歳であった。なお、このうち 8 名については半構造化面接も行った。

調査項目：調査 1 に加え、登山を始めた頃と現在での登山動機の変化を確認するため、Behavioral Regulation in Exercise Questionnaire-2 (BREQ-2) (Moreno, Cervelló, & Martínez, 2007) を参考に自己決定理論に基づく登山動機を 5 件法で尋ねた。自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000) は、自己の行動を起こす過程における自己決定の程度、つまり自律性と統制感によって、動機づけの質が変化するという考えに基づいている。動機づけの質としては次の 5 つである。「非動機づけ」は、行動しない、もしくは行動するにあたって自ら行う意図が欠けている状態である。「外的調整（動機）」は、報酬を貰うもしくは罰を逃れるためにしかたなく従っている状態である。「取り入れ調整（動機）」は、行動の価値を認めてはいるものの、やらなければ罰があると思っている状態である。「同一化的調整（動機）」は、行動に対する価値を認めており、なおかつそれが自分にとって重要なものであると認識しており、積極的に行動をしようとしている状態である。最後に「内発的調整（動機）」は、その行動に興味があるため、またはその行動自体が楽しく、自ら進んで取り組む状態である。登山者用に作成し、たずねた項目は以下の通りである。「なぜ山登りをするのか分からない（非動機づけ）」、「周りの人が山に登ろうと言うから（外的動機）」、「山登りをする事で自分に自信を持てると思うから（取り入れ動機）」、「山登りすることは価値があると思うから（同一視動機）」「山登り自体が楽しいから（内発動機）」。

結果

本研究では、2 つの調査地で調査を行ったが、両者に違いが認められないことから、以後の分析において自己決定動機に関する分析をのぞき、すべて合算したデータで分析を行った。

調査対象者の実態的側面

登山者の性別と年齢

表 1 は、性別ごとの 1 年間の登山頻度である。性別と登山頻度の関連性の検定の結果、有意な関連は認められなかった ($\chi^2_{(6)} = 7.37, n.s., V = .17$)。

表 1 男女別登山者の世代

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70以上	合計
男性	8 (5.5%)	17 (11.7%)	30 (20.7%)	26 (17.9%)	20 (13.8%)	32 (22.1%)	12 (8.3%)	145 (100.0%)
女性	7 (6.1%)	14 (12.3%)	30 (26.3%)	18 (15.8%)	8 (7.0%)	33 (28.9%)	4 (3.5%)	114 (100.0%)
全体	15 (5.8%)	31 (12.0%)	60 (23.2%)	44 (17.0%)	28 (10.8%)	65 (25.1%)	16 (6.2%)	259

表 2 男女別の登山頻度

	1年に1回未満	1年に2～3回	1年に4～5回	1年に6～10回	それ以上	合計
男性	11 (7.6%)	37 (25.7%)	27 (18.8%)	37 (25.7%)	32 (22.2%)	144
女性	16 (13.8%)	14 (12.1%)	29 (25.0%)	30 (25.9%)	27 (23.3%)	116
全体	27 (10.4%)	51 (19.6%)	56 (21.5%)	67 (25.8%)	59 (22.7%)	260

表 3 男女別の登山経験年数

	1年未満	2～5年	5～10年	11～20年	20年以上	合計
男性	19 (13.2%)	46 (31.9%)	25 (17.4%)	15 (10.4%)	39 (27.1%)	144
女性	16 (13.9%)	48 (41.7%)	15 (13.0%)	24 (20.9%)	12 (10.4%)	115
全体	28 (10.8%)	46 (17.8%)	55 (21.2%)	69 (26.6%)	55 (21.2%)	259

年間の登山頻度

表 2 は、性別ごとの 1 年間の登山頻度である。性別と登山頻度の関連性の検定の結果、有意な関連が認められた ($\chi^2_{(4)} = 9.62, p < .05, V = .19$)。ただし、効果量は小さい。残差分析の結果、男性の方が 1 年に 2～3 回の登山を行う者が多い。

登山経験

表 3 は、性別ごとの登山頻度である。性別と登山頻度の関連性の検定の結果、有意な関連が認められた ($\chi^2_{(4)} = 16.13, p < .01, V = .25$)。残差分析の結果、男性が 20 年以上の経験者が多く、女性では 11 年～20 年の者が多い。

同行者

表 4 は、性別ごとの同行者の内訳である。関連性の検定の結果、有意な関連は認められなかった ($\chi^2_{(3)} = 5.50, n.s., V = .14$)。なお、「その他」には「山岳会」などが含まれている。

表 4 男女別の登山同行者

	家族	友人	その他	単独	合計
男性	33 (23.9%)	56 (40.6%)	29 (21.0%)	20 (14.5%)	138 (100.0%)
女性	35 (31.0%)	50 (44.2%)	21 (18.6%)	7 (6.2%)	113 (100.0%)
全体	70 (26.9%)	111 (42.7%)	52 (20.0%)	27 (10.4%)	260

動機の種類

KJ 法による動機の種類

登山のきっかけ、理由として回答してもらった自由記述の内容を KJ 法 (川喜多, 1967) の手順を参考に、まずは 3 名が独立に分類し、その後 3 名で議論を行い纏めたものが表 5 である。大きな分類としては「自然発生」、「精神的充実」、「自然との関わり希求」、「懐古・取り戻し」、「他者からの影響」、「身体づくり」の 6 つのクラスターに分類された。また、それぞれの下位概念、具体的な記述内容の例としては表 5 の通りである。また、

表5 登山動機的自由記述の中身

自然発生	
そこに山があるから	そこに山があるから／なんとなく／登りたかったから
生育環境	子供のころから山育ちで身近だったから／長野県に住んでいて毎日山を見ていたので
精神的充実	
山頂達成感	頂上の素晴らしい景色に感動して／友人に誘われて登った時の達成感
未知への挑戦	新しいことへの挑戦／未知の世界を体験したかった／体力の限界を知りたい
自立・自己探求	1人になりたくて／自分自身を見直しをして目標に向かってやっていく事で自信を持てるから／自分の内面と向き合う時間が持てるから。
自然との関わり希求	
自然・景観	自然が好きだから／昆虫採集の延長線で／景色を見たいから
ハイキングの延長	若い頃ハイキングをしていて15年位前に登山の楽しさに気づいた／ウォーキングから山に登り山の素晴らしさを知った
富士登山経験	20代最後の思い出に中学校の同級生と富士登山に行ったので／富士山に登って楽しかったし、体力的にもっと行けると思ったから
憧憬	友人が登山を楽しんでいるのを見て登りたくなった／知り合いが槍山頂で撮影した写真がキレイだったから
懐古・取り戻し	
懐古・再開	大学1年の常念岳登山実習で／中学校で登山部に入ったから
子育て後の趣味	子育てで離れたが時間ができたので／若い頃登っていて、子育てが終わる頃に自分の楽しみとして再度始めた
他者からの働きかけ	
友人勧誘	友人に勧められて／誘われて
家族の影響	父が山登りをしていたから／親が山の愛好家だったから
職場の影響	会社のイベント／会社の同僚に誘われて／職場での軽登山
パートナーの存在	彼氏が登るから／嫁さんのすすめ／好きな男が山好きだから
メディア影響	雑誌を見て／テレビで見た北穂高からの景色が綺麗だったから
身体づくり	
富士登山訓練	富士登山の練習として低山から始めた／富士登山をする目標ができて
健康維持	健康のため／運動不足解消
体力増強	マラソンのトレーニング／トレーニング／基礎体力向上

これらを構造的に示したものが図1である。

やや強引ではあるが、この構造を解釈すると、x軸方向には山登りが「外発的／手段的」なのか「自発的／目的的」なのかを意味し、y軸方向には登山の際の関心事が「外」に向いているのか「内」に向いているのかという軸を読み取ることが出来るかもしれない。

性別と動機の関連性

性別と動機の関連性の検定の結果、有意な関連が認められた($\chi^2_{(4)} = 41.64, p < .01, V = .39$)。残差分析の結果、男性で多かったものとして「懐古・再開」「そこに山があるから」「自立・自己探求」、女性で多かったものとして、「子育て後の趣味」「富士登山経験」「ハイキングの延長」であった。

世代と動機の関連性

世代と動機の関連性の検定の結果、有意な関連が認められた($\chi^2_{(1)} = 154.53, p < .01, V = .33$)。残差分析の結果、10代で多かったものとして「家族の影響」「自然・景観」、20代で多かったものとして「富士登山経験」、40代で多かったものとして「友人勧誘」「山頂達成感」、70代で多かったものとして「子育て後の趣味」であった。

動機パターンの分析

動機について多次元的に分類するため、「動機タイプ」「性別」「同行者」を投入した最適尺度法による分析を行った(図2)。その結果、第一次元を判別する主な変数は性別であり、正の方向に効いている変数は女性であり、負の方向に男性が効いている。正の方向に効いている動機としては「子育て後の趣味」や「富士登山経験」「憧憬」などであり、これらは女性に多く見られる傾向と言

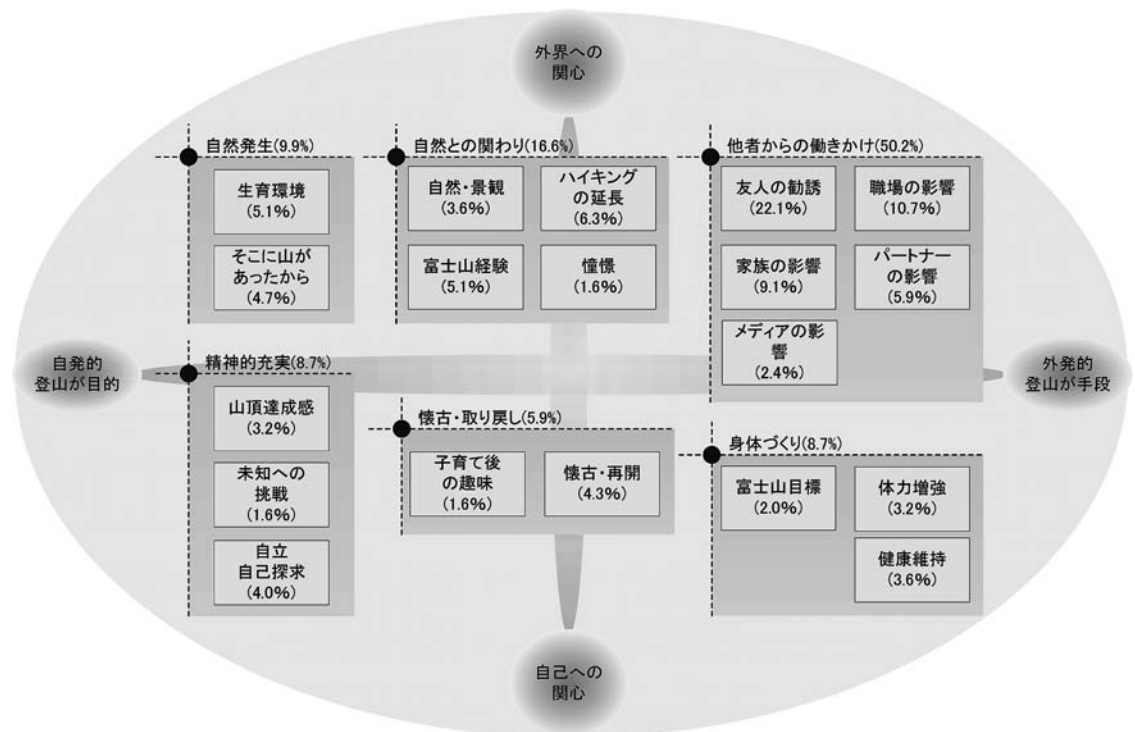


図1 「山登りの理由・きっかけ」のKJ法による分類結果

表6 各動機のカテゴリごとの頻度

	全体	男性	女性
自然発生	25 (9.9%)	17 (12.7%)	7 (6.4%)
そこに山があるから	12 (4.7%)	10 (7.5%)	2 (1.8%)
生育環境	13 (5.1%)	7 (5.2%)	5 (4.5%)
精神的充実	22 (8.7%)	13 (9.7%)	9 (8.2%)
山頂達成感	8 (3.2%)	3 (2.2%)	5 (4.5%)
未知への挑戦	4 (1.6%)	2 (1.5%)	2 (1.8%)
自立・自己探求	10 (4.0%)	8 (6.0%)	2 (1.8%)
自然との関わり希求	42 (16.6%)	10 (7.5%)	29 (26.4%)
自然・景観	9 (3.6%)	3 (2.2%)	6 (5.5%)
ハイキングの延長	16 (6.3%)	4 (3.0%)	10 (9.1%)
富士登山経験	13 (5.1%)	2 (1.5%)	10 (9.1%)
憧憬	4 (1.6%)	1 (0.7%)	3 (2.7%)
懐古・取り戻し	15 (5.9%)	10 (7.5%)	5 (4.5%)
懐古・再開	11 (4.3%)	10 (7.5%)	1 (0.9%)
子育て後の趣味	4 (1.6%)	0 (0.0%)	4 (3.6%)
他者からの影響	127 (50.2%)	70 (52.2%)	54 (49.1%)
友人勧誘	56 (22.1%)	34 (25.4%)	22 (20.0%)
家族の影響	23 (9.1%)	10 (7.5%)	12 (10.9%)
職場の影響	27 (10.7%)	15 (11.2%)	11 (10.0%)
パートナーの存在	15 (5.9%)	8 (6.0%)	7 (6.4%)
メディア影響	6 (2.4%)	3 (2.2%)	2 (1.8%)
身体づくり	22 (8.7%)	14 (10.4%)	6 (5.5%)
富士登山訓練	5 (2.0%)	2 (1.5%)	2 (1.8%)
健康維持	9 (3.6%)	6 (4.5%)	3 (2.7%)
体力増強	8 (3.2%)	6 (4.5%)	1 (0.9%)
合計	253	134	110

表7 各動機のカテゴリごとの頻度

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
自然発生	1 (6.7%)	4 (13.3%)	6 (10.3%)	1 (2.3%)	4 (15.4%)	6 (10.3%)	1 (7.7%)
そこに山があるから	1 (6.7%)	2 (6.7%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)	3 (11.5%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)
生育環境	0 (0.0%)	2 (6.7%)	3 (5.2%)	1 (2.3%)	1 (3.8%)	3 (5.2%)	1 (7.7%)
精神的充実	0 (0.0%)	3 (10.0%)	6 (10.3%)	5 (11.6%)	2 (7.7%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)
山頂達成感	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	4 (9.3%)	0 (0.0%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)
未知への挑戦	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (3.4%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
自立・自己探求	0 (0.0%)	3 (10.0%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)	2 (7.7%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)
自然との関わり希求	5 (33.3%)	5 (16.7%)	9 (15.5%)	9 (20.9%)	3 (11.5%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)
自然・景観	3 (20.0%)	0 (0.0%)	2 (3.4%)	2 (4.7%)	0 (0.0%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)
ハイクの延長	2 (13.3%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	4 (9.3%)	3 (11.5%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)
富士登山経験	0 (0.0%)	4 (13.3%)	5 (8.6%)	2 (4.7%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
憧憬	0 (0.0%)	1 (3.3%)	1 (1.7%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
懐古・取り戻し	2 (13.3%)	1 (3.3%)	1 (1.7%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	6 (10.3%)	4 (30.8%)
懐古・再開	2 (13.3%)	1 (3.3%)	1 (1.7%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	4 (6.9%)	2 (15.4%)
子育て後の趣味	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (3.4%)	2 (15.4%)
他者からの影響	7 (46.7%)	15 (50.0%)	30 (51.7%)	25 (58.1%)	14 (53.8%)	28 (48.3%)	5 (38.5%)
友人勧誘	0 (0.0%)	7 (23.3%)	9 (15.5%)	16 (37.2%)	7 (26.9%)	13 (22.4%)	4 (30.8%)
家族の影響	7 (46.7%)	0 (0.0%)	7 (12.1%)	1 (2.3%)	1 (3.8%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)
職場の影響	0 (0.0%)	6 (20.0%)	8 (13.8%)	2 (4.7%)	4 (15.4%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)
パートナーの存在	0 (0.0%)	2 (6.7%)	4 (6.9%)	5 (11.6%)	1 (3.8%)	2 (3.4%)	1 (7.7%)
メディア影響	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (3.4%)	1 (2.3%)	1 (3.8%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
身体づくり	0 (0.0%)	2 (6.7%)	6 (10.3%)	2 (4.7%)	3 (11.5%)	4 (6.9%)	3 (23.1%)
富士登山訓練	0 (0.0%)	1 (3.3%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (7.7%)
健康維持	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (5.2%)	1 (2.3%)	1 (3.8%)	3 (5.2%)	1 (7.7%)
体力増強	0 (0.0%)	1 (3.3%)	1 (1.7%)	1 (2.3%)	2 (7.7%)	1 (1.7%)	1 (7.7%)
合計	15	30	58	43	26	58	13

えるだろう。また登山のスタイルとしては男性で単独登山をするものは、そこに「山があるから」登り、「懐古再開」「自己探求」などを求めている。

また、図3は世代や経験年数も同時に加えて分析をした結果である。なお、10代については欠損値が多かったため分析からは除外をした。この結果を見ると、正負の方向性に違いが見られるが第一次元は図2と同じく性別を判別しているといえるだろう。また、第二次元については、時間（世代と経験年数）を判別している。正の方向に強く効いているものほど若い世代であり、負の方向に強く効いているものは高齢世代である。若い世代の方向では「富士登山の経験」や、「富士登山を目標」とするもの、「メディアの影響」の他に、「自立・自己探求」のための山登りが位置している。反対に高齢世代の方向には「子育て後の趣味」や「山頂の達成感」「懐古・再開」などが位置している。第一象限からは、女性の若年層が

富士登山や憧憬をきっかけとし友人と登山をしているタイプが伺える。第二象限からは、男性の若年層が単独で自己探求を求めて登山をしている姿が伺える。第三象限は男性の高齢層が体力増強や懐古的な思いから登山をし、第四象限は女性の高齢者が家族とハイキングの延長から山頂での達成感を求めて登山をしていることなどが解釈できるだろう。

自己決定動機の時間的变化

現在の自己決定動機と登山を始めた当時の自己決定動機の変化について検討するため、それぞれを要因とする2要因分散分析を行った。その結果、自己決定動機の主効果 ($F(4,428) = 44.00, p < .01, \eta_p^2 = .16$)、時間の主効果 ($F(1,428) = 20.79, p < .01, \eta_p^2 = .61$)、交互作用効果 ($F(4,428) = 36.75, p < .01, \eta_p^2 = .53$) がそれぞれ認められた。各動機に対する時間の単純主効果の検定を行ったところ、外的動機を除く全ての動機に対して時間

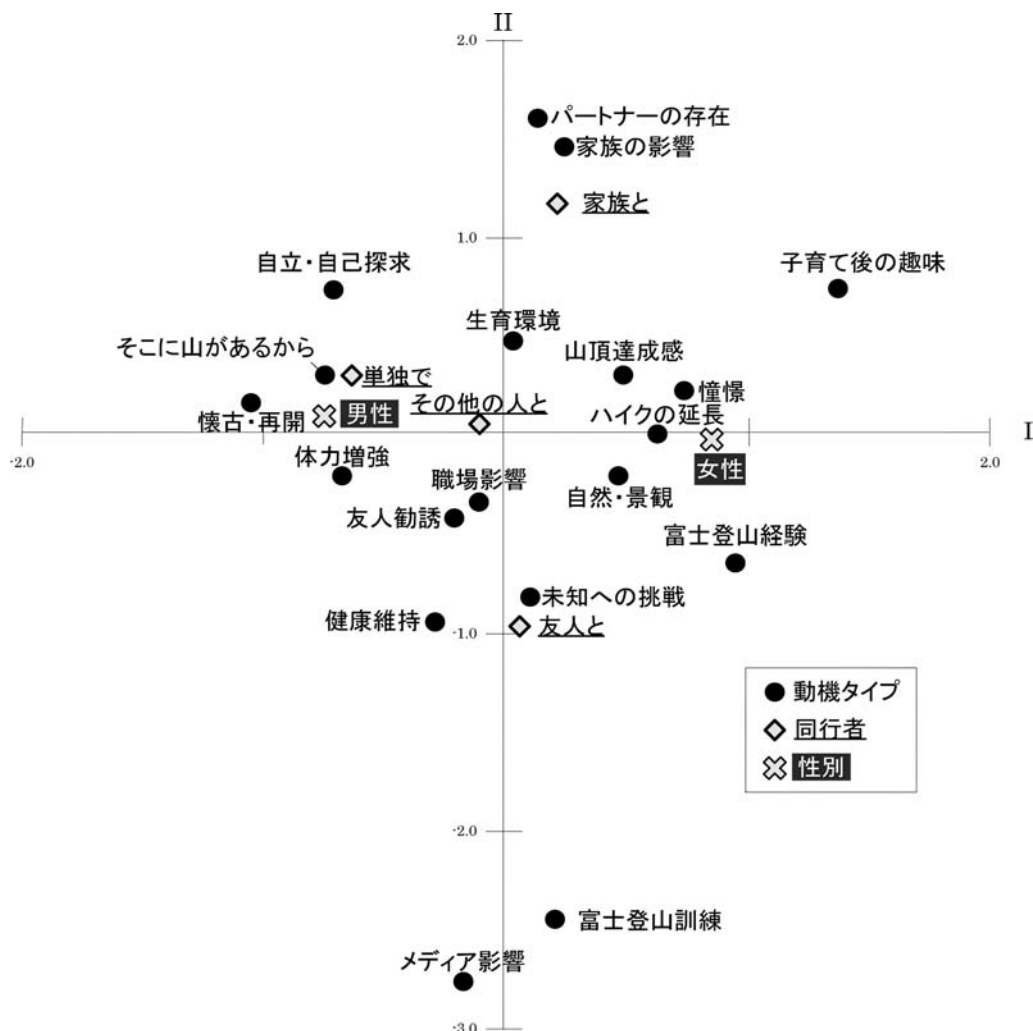


図2 登山者デモグラフィック要因の最適尺度法の結果1

の単純主効果が認められた。つまり、時間の経過と共に内発動機、同一視動機は高まり、取り入り動機、非動機づけは低下した（表8）。

登山動機のタイプの違いによる自己決定的動機の変化について検討するため、登山初期と現在の自己決定動機の変化量を計算し、それぞれを要因とする2要因分散分析を行った。その結果、自己決定動機の主効果 ($F(4,400) = 34.67, p < .01, \eta_p^2 = .26$)、交互作用効果 ($F(20,400) = 2.12, p < .01, \eta_p^2 = .09$) がそれぞれ認められ、動機タイプ主効果 ($F(5,100) = 1.24, n.s., \eta_p^2 = .06$) は認められなかった。自己決定動機変化量に対する動機タイプの単純主効果の検定を行ったところ、内発的動機に

表8 現在と登山経験初期の自己決定動機の平均値 (SD)

	現在 Mean (SD)	登山経験初期 Mean (SD)
内発動機	4.53 (0.75)	3.22 (1.54)
同一視動機	4.05 (1.11)	2.69 (1.24)
取り入り動機	3.69 (1.14)	3.99 (1.03)
外的動機	2.57 (1.43)	2.85 (1.38)
非動機づけ	2.38 (1.41)	3.38 (1.21)

において、他者からの影響が精神的充実と自然との関わり希求に有意な差が認められ、他者からの影響動機を持つものが内発的動機の変化量が小さいことが分かる（表9）。

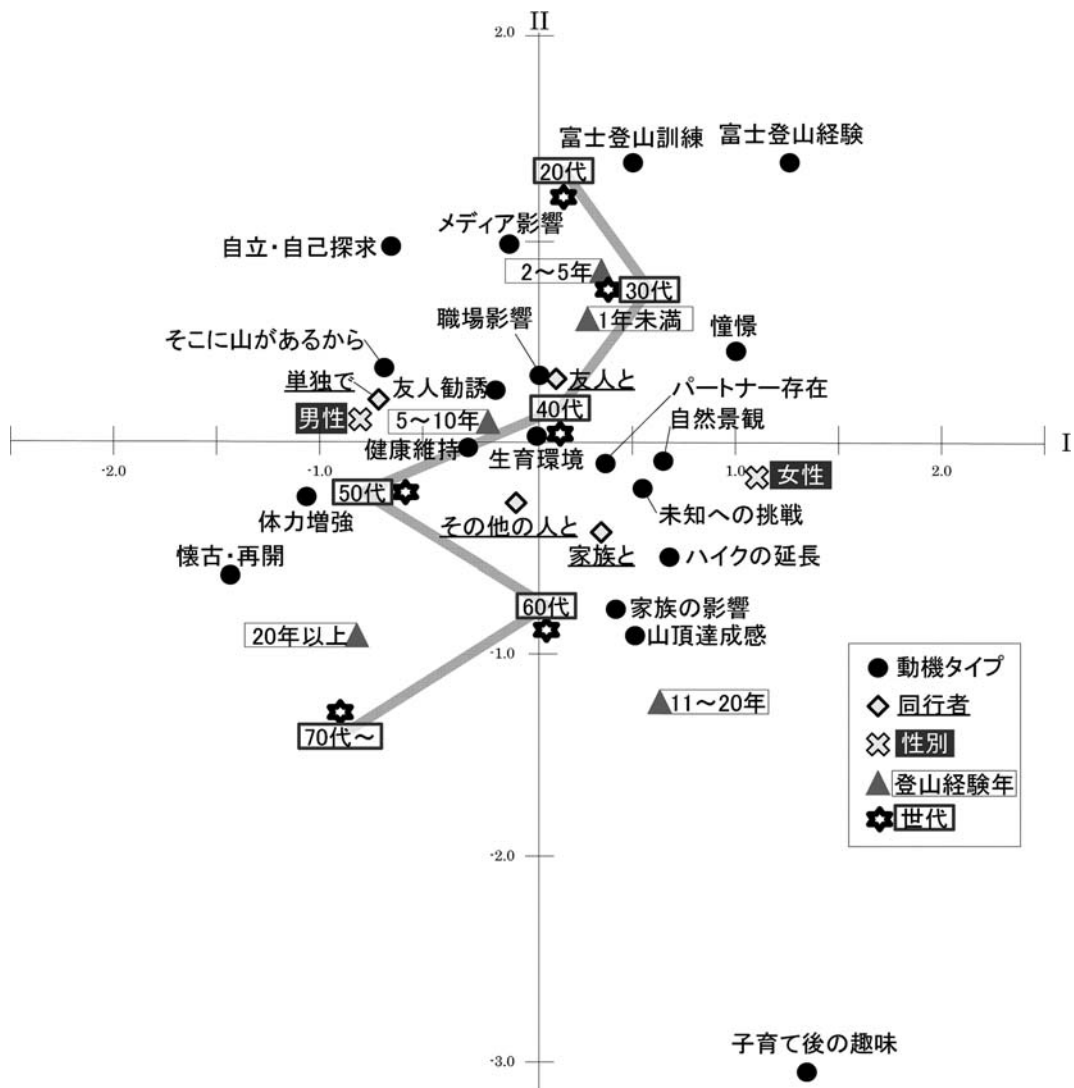


図3 登山者デモグラフィック要因の最適尺度法の結果 2

表9 動機のタイプごとの自己決定動機

	自然発生	精神的充実	自然との 関わり希求	懐古・ 取り戻し	他者からの 影響	身体づくり
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
内発動機変化	1.50 (1.38)	2.89 (1.17)	2.59 (1.58)	2.25 (1.28)	0.47 (1.57)	1.11 (2.52)
同一視動機変化	2.08 (1.31)	0.78 (1.48)	1.35 (2.09)	1.63 (0.74)	1.31 (1.54)	0.89 (1.17)
取り入り動機変化	0.17 (1.53)	-0.67 (1.32)	-0.94 (1.64)	-0.50 (1.07)	0.00 (1.50)	-0.56 (1.33)
外的動機変化	-0.58 (1.31)	-0.67 (1.87)	-0.35 (1.54)	-0.38 (0.92)	-0.29 (1.85)	0.78 (1.79)
非動機づけ	-1.00 (0.95)	-1.22 (1.39)	-0.94 (2.22)	-1.75 (2.25)	-0.96 (1.92)	-0.78 (2.44)

考察

本研究では、登山行動に関する社会心理学的研究の最初の足がかりとして、登山者の動機の構造を明らかにし、またその時間的变化について検討することであった。

登山者の実態

登山者の実態については、結果に示したとおり(表1~3)、従来の研究と比べても、かなり幅広い世代が登山行動を行っていることが分かる。全体の割合としては、男女とも60代以上が多く、それに30代が続いている。1980年代の中高年のブームと言われた頃の実態からは大きく異なっている状況といえるだろう。また、同行者をみても山岳会のメンバーなどと一緒に登る割合は低く、登山行動について山岳会などを中心とした調査では正確な把握は出来ないといえるだろう。また、登山経験や1年間の登山頻度をみても、ロッククライミングなどを行う経験豊富な登山家のような存在は稀であり、近年の登山ブームを反映した形で、あらためて登山行動について検討をしておく必要があるだろう。

登山動機の構造

登山動機について、大きな分類としては「自然発生」、「精神的充実」、「自然との関わり希求」、「懐古・取り戻し」、「他者からの影響」、「身体づくり」の6つのクラスターに分類された(図1、表5)。登山行動も観光行動もレジャー行動の一つであると考えられるため、まずは登山動機について観光動機との対応を検討する。

旅行者を休暇旅行者と長期旅行者に分け調査を行った林・藤原(2004)では、「開放動機」「娯楽的動機」「社交動機」「見聞動機」「体感動機」「精神的動機」という6つの構成要素を見出している。本研究の結果との対応関係をみると、「精神的充実」は「精神的動機」に、「他者からの影響」は「社交動機」にそれぞれ近い概念だといえるだろう。また、海外旅行者を対象に調査を行った林・藤原(2008)の作成した観光動機尺度では、「刺激性」「文化見聞」「現地交流」「健康回復」

「自然体感」「意外性」「自己拡大」という7因子を見出している。「刺激性」は、本研究での「精神的充実」の下位概念である「山頂達成感」や「未知への挑戦」に近い概念だといえる。いずれの概念も、日常から刺激のある非日常に対する希求感からの行動といえるだろう。「自然体感」は、「自然との関わり」と対応した概念だといえるだろう。「健康回復」については、「身体づくり」の下位概念である「健康維持」が関連している。ただし、本研究での「健康維持」は、どちらかといえば年齢と共に落ちていく体力を維持したいという側面であるのに対し、林・藤原(2008)の「健康回復」は、転地効果によるストレスの解消や疲労の回復といったように、原状回復という側面に重きが置かれているといった違いがみられる。また、「自己拡大」は、「精神的充実」の下位概念である「自立・自己探求」に対応しているといえるだろう。

観光と登山とでは、もちろん行為そのものも異なれば、その対象の広さや目的も異なっている。しかし、両者とも時間や金銭のコストを負担してでも、日常とは異なる場所へ身を置こうとしている点で共通している。観光動機と登山動機の共通する概念を見てみると、「刺激希求」、「自己探求」、「身体的変化」という点であった。これらは、人がなぜ目的地を決め、移動をし、歩くのか、ということの基本的な要素といえるかもしれない。例えば、新奇性欲求は人々を観光行動へとかりたてる根源的な心理的要因であるという指摘もある(Crompton, 1979)。

また、四国八十八ヶ所遍路の巡礼者を対象に行った藤原(2001)の調査では、巡礼中に感じたことの自由記述内容を構造化した結果、「他者性」「信仰」「自己過程」にまとめているが、その中の自己過程には「精神性」「自己省察」「身体性」が含まれている。これらは、本研究の結果での「自己探求」、「身体的変化」の内容と類似しており、歩くという行為に共通している側面だといえるかもしれない。

そもそも、登山史のまとめでも言及したように、登山行動は、歴史的観点から見れば巡礼行動や宗教的意味との関連も強い。しかし、本調査の結果からは宗教的意味合いから登山を行っている

という者は見られなかった。辰濃（2001）や藤原（2003）でも指摘されているように四国巡礼においても宗教的動機に基づく者はほとんどいないということとも一致する。また、動機としては宗教的意味が出てこなかったが、そこで得られている効果としては部分的には巡礼行動などによって得られる効果と類似している可能性もあるだろう。巡礼者に関する一連の研究（藤原，1999, 2000 ab, 2001, 2002, 2003）を参考に、改めて検討する必要があるだろう。

登山動機の違い・変化

男女とも最も多い登山動機は他者からの影響で友人などに誘われることであった。また女性については自然との関わりを求める者が多く、男性では自然発生的な動機が高い傾向にあった（表6）。その他のデモグラフィック要因との関係からみても（図2・図3）、どちらかといえば女性は外的な影響（パートナーの存在、富士登山契機、自然景観など）によって登山をしているというパターンが多いといえるだろう。それに対して、男性はどちらかといえば自分のために行う（自己探求、体力増強、懐古など）傾向があるといえるだろう。

また、世代の違いについて検討してみると若い世代がメディアの影響や富士登山を目標あるいは契機とした登山動機との関連が強かったのに対して、40～50代では、他者からの誘いや健康のために登山を行うことが増えてくるようである。60代以降は、懐古、子育て後の趣味、山頂達成感など自分がこれまでやってきたことの再確認や充実感を求めて登山をしているようである。大まかに言えば世代があがるにつれて外的な影響から、より内的な理由のために登山をしているといえるだろう。

このことは自己決定性動機の変化からもよみとることができる。自己決定性動機の変化をみると、登山を開始した当時に比べると現在の方が、内発動機や同一視動機といった、より自律性の高い動機が高まっていた。すなわち、きっかけとしては外発的であった登山が、徐々に自分のための山登りとなっていくようである。

展望

また、本研究では、登山行動の中でも動機についてのみ焦点を当てて研究を行っている。藤原（1999）は巡礼者の研究について、巡礼行動への動機、巡礼行動の過程、巡礼行動の残効効果についての検討の必要性を述べているが、登山行動についても同様の枠組みから検討をすべき点はまだまだ残されているといえるだろう。また、とくに残効効果については、巡礼（藤原，2001, 2003）や観光行動（林・藤原，2008）で、精神面でも健康面でもプラスの影響を与えていることが指摘されているように、登山行動でも類似した効果があると考えられる。これらの点も含めてさらなる研究を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- Bratton, R. D., Kinnear, G., & Koroluk, G. (1979). Why man climbs mountains. *International Review for the Sociology of Sport*, 14(2), 23-26.
- Crompton, J. L., (1979). Motivations for pleasure vacation. *Annals of Tourism Research*, 6(4), 408-424.
- Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond boredom and anxiety*. San Francisco: Jossey-Bass. (チクセントミハイ, M. 今村浩明 (訳) (2000). 楽しみの社会学 新思索社)
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper Collins. (チクセントミハイ, 今村浩明 (訳) (1996). フロー体験—喜びの現象学—, 世界思想社)
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of Research in Personality*, 19, 109-134.
- 藤原武弘 (1999). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (1) 関西学院大学社会学部紀要, 82, 157-169.
- 藤原武弘 (2000 a). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (2): 四国遍路体験者のケース・スタディ 関西学院大学社会学部紀要, 85, 109-115.
- 藤原武弘 (2000 b). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (3): サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者の調査的研究 関西学院大学社会学部紀要, 88, 23-31.
- 藤原武弘 (2001). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (4): 四国八十八ヶ所遍路の調査的研究 関西学院大学社会学部紀要, 90, 55-69.

- 藤原武弘 (2002). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (5) 四国八十八ヶ所遍路とサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼の比較 関西学院大学社会学部紀要, 91, 61-70.
- 藤原武弘 (2003). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (6) 四国遍路手記の内容分析 関西学院大学社会学部紀要, 93, 73-91.
- 深田久弥 (1964). 日本百名山 新潮社.
- 深田クラブ (1992). 日本 200 名山 昭文社.
- 古澤有峰 (2009). 「山のスピリチュアリティ」試論—山の非宗教化と再聖化の観点から—東京大学宗教学年報, 26, 45-62.
- Goethe, J. W. von. (1916-17) *Italienische Reis.* (ゲーテ・相良守峯 (訳) (1960). イタリア紀行 上下 岩波書店.
- 張本文昭・大村三香・平良勉・小橋川久光・川端雅人 (2000). 登山におけるフロー経験 野外教育研究, 4(1), 21-37.
- 林幸史・藤原武弘 (2004). 長期旅行者と休暇旅行者のモチベーション構造の相違 関西学院大学社会学部紀要, 97, 97-104.
- 林幸史・藤原武弘 (2008). 訪問地域, 旅行形態, 年齢別にみた日本人海外旅行者の観光動機 実験社会心理学研究, 48(1), 17-31.
- 本多勝一 (1966). 山を考える. 実業之日本社.
- 飯田稔・坂本昭裕・遠藤浩 (1989). 中高年の登山の動機に関する研究筑波大学体育科学系運動学研究分野運動学研究, 5, 21-26.
- 磯貝猛・三宅岳 (2012). 山と高原地図 37 昭文社.
- 桑原武夫 (1953). 登山の文化史 創元社.
- 川喜多二郎 (1987). 発想法 中央公論新社.
- 小林晃夫・小川新吉 (1968). アルピニストの心理と性格, 東京教育大学スポーツ研究所報, 6, 1-16.
- 小泉武栄 (2001). 登山の誕生 人はなぜ山に登るようになったのか 中公新書.
- 倉野憲司 (1963). 古事記 岩波文庫.
- 松田雄一 (2005). マナスル登頂と登山ブーム 社団法人日本山岳会会報「山」2005 年 9 月号 (<http://www.jac.or.jp/info/news/200509.htm>)
- Moreno, J. A., Cervelló, E. M., & Martínez, A. (2007). Measuring self-determination motivation in a physical fitness setting: validation of the Behavioral Regulation in Exercise Questionnaire-2 (BREQ-2) in a Spanish sample. *The Journal of Sport Medicine and Physical Fitness*, 47(3), 366-378.
- Rousseau, J. J. (1761). *La nouvelle Helois* (ルソー (著)・安土正夫 (訳) (1960). 新エロイズ 岩波書店.)
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryn, Z., (1974). Psychopathology in Alpinism. *The Himalayan Journal*, 32. (Reprinted from *Acta Medica Polona*, 12, 453-467.)
- 瀧ヶ崎隆司 (1983). 尾瀬を訪れる中高年登山者・ハイカーの動機, 行動と計画 明治薬科大学研究紀要. 人文科学・社会科学, 27, 63-74.
- 瀧ヶ崎隆司 (1999). ハイキング行動の動機づけ 早稲田心理学年報, 31, 21-3.
- 瀧ヶ崎隆司 (2005). 登山者・ハイカーの動機——東京近郊の日帰り登山者を対象とした調査 日本工業大学研究報告, 34(3/4), 301-307.
- 佐藤知行 (1989). クライマーの動機とフロー経験に関する研究. 筑波大学体育研究科修士論文抄録, 11, 41-44.
- 辰濃和男 (2001). 四国遍路 岩波新書
- The New York Times (1923). Climbing Mount Everest is work for supermen. March 18, 1923 The New York Times.
- Weston, W. (1896). *Montaineering and exploration in the Japan alps.* (ウェストン (著)・青木枝朗 (訳) (1997). 日本アルプスの登山と探検 岩波書店.)
- 山崎安治 (1986). 日本登山史 白水社.

Social Psychological Study of Mountain Climbing: Structure of Alpinism Motivation and its Development

ABSTRACT

In this paper, we aim to delineate the structure of “alpinism motivation” and examine the development of such motivations. A total of 270 respondents who climbed the Japanese Northern Alps completed the questionnaire at mountain lodges. Results show alpinism motivation consisted mainly of six motives: “spontaneous motive”, “natural motive”, “invitational motive”, “spiritual motive”, “nostalgia motive”, and “healthy motive.” The optimal scaling of the climbers’ demographic variables indicate four types of climbers: 1) mainly young women who climb with friends and are influenced by others or media, 2) mainly young men climbing alone and for introspection, 3) mainly old men climbing for health reasons, and 4) mainly old women climbing with family for a sense of fulfillment and to extend a hiking experience. From these findings, we compare alpinism motivation with tourism and pilgrim motivation.

Key Words: climbing, alpinism motivation, self-determination theory